

### 農村社会学の視野と農村開発—生活改善運動における「社会的準備」活動

池野雅文

#### ●はじめに

日本の農村社会学では、第二次大戦前から鈴木栄太郎や有賀喜左衛門等によって「家」と「村」という二つの対象を分析視角の中心に据え、日本の民族的特質を社会関係から把握するという実証的な調査研究が行われてきた。膨大に蓄積されてきた農村社会の実証事例は、戦後の農村社会学者等にも受け継がれ、戦後日本の農村開発にも活用されていた。

そこで、本稿では戦後から高度経済成長初期ごろまでの生活改善運動、特に開発援助における「社会的準備」的な活動に焦点をあて（参考文献①参照）、戦後日本の農村開発において農村社会学的な視角が担った役割を概観し、現代途上国の農村開発における農村社会学的な視野の活用についてふれてみたい。

#### ●戦後農村社会学の出発点

終戦直後の日本農村社会学では、民主化を旨とした連合軍総司令部（GHQ）指導の下、農地改革をはじめまる地主制の排除、小

農的自作農体制、村落の共同体的な性格の解体化という農村社会の変動が起きていた。

このような農村社会にみられる封建遺制克服の課題を時代背景として、日本の農村社会学では福武直等が中心となり、「農村の民主化」という課題を設定するとともに実践的指導理念として農村社会学に体系づけようとしていた。福武は、当時の農村社会学において、「農村の変動し難い社会的性格を徹底的に追及し、民主化を阻む条件が如何にして克服されるかを科学的に検討」する必要性を指摘していた（参考文献⑧参照）。つまり、戦後復興という時代的な要請に応じて、戦前の農村社会学が問題意識とした家と村を分析視角とした農村社会の分析を基本に据えつつも、農地改革や民法改正などをはじめとする制度的な改革が農村にいかなる変化をもたらしたか、換言すれば農村社会変動の解明を課題に据えることに問題意識が移っていた（一方、戦前の農村社会学が明らかにしていた農村生活の多様な生活事実を社会構造の中に組み込めなくなっていたという見解もある）（参考文献⑥参照）。

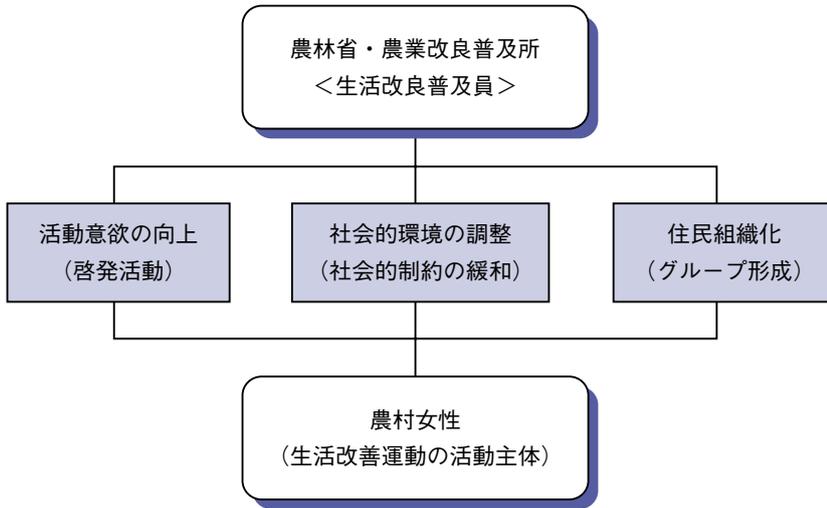
以上のような問題意識の下、農村社会で起こっている諸問題への関心を惹起し、その解決策を見出すという調査や研究を進めたり、あるいは行政機関、農協、農村住民等とともにその実践に当たっていたりした農村社会学的な視野をもつ研究者も少なくなかった。

#### ●戦後日本農村の生活改善運動と「社会的準備」活動

戦後の制度改革の展開において、日本農村では住民の自主的な生活改善運動を支援するという農村開発が行われていた（参考文献③参照）。特に、農業改良助長法に基づく生活改善普及事業（一九四八年〜現在）では、封建遺制による社会的な制約によって現在の開発援助で語られるところの社会的弱者に位置づけられていた農村女性の地位向上に焦点を当てた支援が行われていた。

この農林省による生活改善普及事業において、農村女性に働きかけるファシリテーター的な役割は農業改良普及所に所属する生活改良普及員（以下、生改さん）であっ

図1 生活改善普及事業における「社会的準備」活動



(出所) 参考文献①を基に筆者作成。

た。生改さんによる農村女性への取り組みは、現在の開発援助の現場で散見される、技術者や普及員が一方的に農村女性の知らない技術や知識を切り売りに伝えるやり方とは異なっていた。生改さんは、農村社会の固有要因に配慮しながら、農村女性が生活改善について「自ら考え、自ら理由をみつけ、自ら決定して実行する」ことができる農村女性のエンパワーメント達成を導くように働きかけていた。つまり、生改さ

んは、プロジェクトの「下ごしらえ」的な活動であるところの開発援助における「社会的準備」(Social Preparation)を人念に行い、プロジェクト活動の円滑化に努めていたのだ。

ところで、ここでいう開発援助における社会的準備とは、受益者となる現地住民が外部者であるドナーの支援を受け、①開発の必要性に気づいて活動意欲を向上させ、②活動の制約要因となる社会的環境を調整し、③開発の目的達成のために必要と認められる場合には住民組織を形成していく、といった一連の活動をさすものである(図1参照)。

### ●農村社会的視野の位置づけ

生活改善的な活動は戦前から今和次郎等といった個々の活動家レベルによって主に都市部で試みられていたものの、その活動が農村部にまで広く普及するという段階までには至っていなかった。つまり、終戦直後に創設された生活改善普及事業は、GHQ指導の下、ほとんど無からの手探り状態で始まっていたのだ。

このような背景の下、生活改善普及事業当初の組織体制は、人的資源の観点からみると社会的な素養のある人材は登用されていなかった。主管官庁の担当部署である農林省農業改良普及部生活改善課では、家政学を中心にして建築学、栄養学、医学という幅広い分野の人材が採用されつつも

社会学を専門とした職員はいなかった。生改さんもまた、採用試験の受験資格からうかがわれるように家事や栄養といった家政学を専門とする女性が求められていた(その後、「生活改良普及員として必要な教養を問う」として、「農村社会学」も試験選択項目の一つになった)。

しかしながら、このような組織体制のあり方が生活改善普及事業に農村社会的な視野を組み込んでいなかったことを意味するものではない。

生活改善普及事業の活動内容を検討する事業当初の会合等では、今和次郎等のように戦前から生活改善的な活動をしていた有識者、丸岡秀子等の婦人問題専門家、東畑精一や大内力等の社会学者に加え、福武等の農村社会学者も参画していた。その後も、農村社会的な視野をもつ研究者等が生改さん等への研修や講演などの場で生活改善課を支援していた(参考文献②参照)。

また、総理府管轄の新生活運動協会による調査ではあるが、福武門下の農村社会学者等によっても現在の開発援助でいうところの事業評価が生活改善運動について実施されていた(参考文献⑤参照)。その調査の分析視角では、「調査にあたっての観点」は、運動がいかなる層によって指導され、どのようにすすめられたか。運動推進の主体はいかに構成され、地域の村落の構造とどのように関連していたか。さらに運動の推進に当たっていかなる困難が生まれ、い

表1 生活改善をしようとして困ったこと

経済	社会			人間関係			その他
資金がない／資金不足	業者が売込みに来ること	地域指導者の無理解	迷信	グループ員間の足並みが揃わない	男子の非協力・無理解	家族の非協力、老人の反対	
40%	2%	6%	15%	9%	8%	18%	2%

(出所) 参考文献⑦を基に筆者作成。

(注) 生活改善運動に平均2年以上参加してきた農村女性の意識調査結果。

かに超克されていたかなどであり、農村地域の社会生活においてきわめて重要な位置を占めている村落の社会構造との関連を「村落構造」との社会関係から生活改善運動に対する事業評価や政策提言を行っていた。

同様に、生活改善運動における「社会的環境の調整」の重要性を指摘する有識者もいた。例えば、建築学・考現学の立場から戦前より生活改善に関与していた今和次郎は、生活病理という観点から「内科的な方面のこと」というのは、人間の心、つまり観念にかかわる事項で、家族関係や社会関係などにみられる病気で、外科的な方面のもの、もっぱら物質に関する具体的な衣食住、衛生方面などのことです。内科的な家族関係の近代化の先行こそ、外科的な生活改善をスムーズに運ばせる原動力だといえるのではないだろうか、「家の家族関係や農村の社会関係を姑と嫁との関係を解消してからでなかつたならば、それは疲労の加算となるだけの場合がある」などと、農村における社会的制約の克服こそが生活改善の前提であると指摘していた(参考文献④参照)。

以上の中央行政レベルや研究者等の見解は、現場レベルで活動する生改さんにも認識されていた。生改さんからは、表1にみられる家の制約(夫や姑の理解不足や限られた余暇や小遣い等)や村の制約(慣習・

迷信や地域指導者層の理解不足等)といった社会的制約に留意して普及活動を進めるべきであるという報告が少なくなかった。例えば、生改さんが生活改善活動に取り組む場合、「生活改善グループ育成には、女子のみでなく、その裏面の環境を整えてゆくつもりで、表に出ない内面的な姿を、普及員が確実に把握することが、育成の急所であると考えます」、「グループを育成していくには一人一人を十分知っていなければならぬ。AさんとBさんの家同士の関係を知った。一年前半年近くこなくなつたのは、二人の家同士間にいざこざがあつたことが原因らしいことを知った」といったように実践活動の中から生活改善を取り巻く社会的制約を把握し、分析するという農村社会学的な視野の必要性が認められていた(参考文献⑦参照)。

以上のとおり、農林省生活改善課等の行政実施機関では、生改さん等が活動現場で直面した社会的事実や社会的制約などの知見や教訓を組織内部で蓄積するとともに、農村社会学者といった外部の人的資源を有効に活用して農村社会学的な視野に関する知見を補充していたといえよう。

### ●農村社会学的視野の活用

上述のとおり、戦後日本農村における生活改善普及事業では、家の制約や村の制約という社会的制約の調整、すなわち社会的準備活動の一つである「社会的環境の調整」が、生改さんにとって円滑な普及活動を行うために重大な関心事項であつた。

普及活動の現場で生改さんが直面した農村社会の社会的制約の経験や教訓が蓄積された結果、生改さんの声が中央の農林省生活改善課まで伝わり、農村社会学的な視野が事業に取り込まれるようになっていった。具体例としては、生改さん向けの研修基準課程において「農村社会と生活」という領域が、「農政と生活改善普及事業」、「農業の概要」、「普及指導方法」、「農家の労働衛生」、「農家の食生活」、「農村の居住環境」、「農家の生活経営」と並んで普及活動基本領域の一つとして組み込まれてきたことが挙げられる。

この「農村社会と生活」という研修領域では、科目別目標を「農村社会の特徴等について理解し、農業者の社会生活及び家庭生活の問題を総合的にとらえ、現在から将来にわたる生活改善対策及びその準備の方法を取得する」と位置づけ、「農村社会」や「農家生活」といった社会配慮を踏まえた普及活動を担える人材を養成することを目的として、表2に示すような研修科目が設定されることになってきた。

ここで、一九五〇年代半ばに生改さんが農村女性の活動意欲の向上とその制約要因の調整に関する調査活動を実践した事例をみてみよう。

この生改さんは、生活改善グループ結成後一五カ月目の農村女性に対してグループ

表2 生活改良普及員の「農村社会と生活」に関する研修科目

普及活動基本領域「農村社会と生活」	研修科目
目標1： 個別経営または生活改善グループ単位程度の範囲における生活改善に必要な個別的・複合的な知識・技術の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代農村社会の特徴</li> <li>・農村の社会構造</li> <li>・農家生活の特徴と問題</li> <li>・農家生活に関する調査</li> <li>・生活改善における技術の役割と活用</li> </ul>
目標2： 地域ぐるみで進めるべき生活改善課題の解決に必要な基礎的知識・技術及び地域の組織化に必要な知識・技術の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活の構造と農家生活の将来像</li> <li>・地域社会における生活面の組織化</li> <li>・農家生活と国際的視野</li> </ul>

(出所) 参考文献⑧を基に筆者作成。

としての活動が行いにくい農繁期に農村調査を二カ月かけて行っている。具体的な調査活動は、第一に「戸別訪問を重点的に行う(家族関係などをよく知る。今迄のクラブ活動を反省させるようなことを聞く。クラブに対してどんな考え方を持っているかを知る。グループ員を階層に分ける準備をする。)」<sup>①</sup>、第二に「部落全体、生活改善グループの動きについて知る(役職を持つ人の家を訪問。村役場、農協等へ歩く。他部落の人達からも様子をつかむ。)」ということであった(参考文献⑦参照)。このような農村社会学的な調査結果を踏まえ、生改さんは生活改善活動を取り巻く社会的な制約要因を抽出し、その後のグループ活動のあり方について検討していたのであった。

### ●おわりに

農村社会学的な視野をふまえた社会的準備活動はその成果や評価を定量的に捉えにくく、さらに援助の投入資源も大きくなるため、これまでの開発援助ではその必要性に

気づきながらも、実際の開発援助の過程には組み込みにくいものとされたり、単に形式的にプロジェクト活動の一つとして組み込まれたりされてきた。

一方、近年、参加型アプローチやプロジェクトの持続性を重視する傾向が高まる開発援助の現場では、このような社会的準備を軽視したためにプロジェクトが頓挫したり、持続性が保てなかったりした経験や教訓から、農村社会学的な視野を取り込んだ社会的準備を活動の一つとして位置づけるプロジェクトも見受けられるようになってきた。

農村開発プロジェクトに社会的準備活動を明確に位置づけることが求められている現在、次の三点が農村開発の現場で期待されるのではなからうか。第一に、外部者であることからこそ明らかとなる社会的事実や社会的制約などが少なくないことから、比較社会論的な立場から途上国農村社会を捉えることができる農村社会学的な素養のある外部者の活用が挙げられる。第二に、途上国の政策立案者、プロジェクト実施者現場で活動する普及員やファシリテーター等に対して農村社会学的な素養をもつ人材として育成・支援することが挙げられる。第三に、開発援助の視点から戦後日本の生活改善運動における農村社会学の役割を再評価することが挙げられる。

(いけの まさふみ/コーエイ総合研究所 所主任研究員)

### 《参考文献》

- ①池野雅文「開発援助における社会的準備とエンパワーメント」佐藤寛編『援助とエンパワーメント』アジア経済研究所、二〇〇五年。
- ②市田(岩田)知子「生活改善普及事業の理念と展開」『農業総合研究』第四九巻第二号、農業総合研究所、一九九五年。
- ③国際開発学会「特集 戦後日本の農村開発経験」『国際開発研究』第一一巻第二号、国際開発学会、二〇〇二年。
- ④今和次郎「生活学」(第五巻)、『家政論』(第六巻)『今和次郎集』ドメス出版、一九七一年。
- ⑤新生活運動協会「地域活動を進めるために―村落構造の変容と住民の意識」一九六一年。
- ⑥高橋明善「農村社会学における生活研究と社会構造研究」北川隆吉監修『社会・生活構造と地域社会』時潮社、一九七五年。
- ⑦農林省農業改良局生活改善課『生活改良普及員のあゆみ』一九五五年。
- ⑧蓮見音彦編『社会学講座 第四巻 農村社会学』東京大学出版会、一九七三年。
- ⑨浜田陽太郎編『これからの普及活動をどうすすめるか』社団法人農山漁村女性・生活活動支援協会、一九八七年。